

## 『古小?鉤沈』校本：一?史子裴子語林

著者	中嶋 長文
雑誌名	神戸外大論叢
巻	43
号	2
ページ	23-63
発行年	1992-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002084/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002084/</a>



『古小説鉤沈』校本 一 青史子 裴子語林

魯迅編輯

中島長文校

序言

六朝以前の古小説の佚文を搜輯した『古小説鉤沈』の價值についてはあらためて言うまでもない。またその成書の経緯についても林辰氏の『魯迅述林』（一九八六年、人民文學出版社）に收められた『鉤沈』に關する四篇の文章がほぼその要を盡していよう。

残念なことに『鉤沈』は魯迅自身が言うように、かれの最終的な整理を経たものではない。一九三五年、鄭振鐸からの出版の誘いを斷つた手紙にいう。

『古小説鉤沈』については、印刷することはないと思います。というのは一つにはずいぶん長らくうちやっていたので、もう一度整理しなおすとなると、また新しく手間ひまをかけなくてはなりません。二つにはこういう書物は讀む人間はたぶんいくらもないでしょうから、いましばらくは放っておいて、いつか暇ができたときにまた

考えることにすればよろしい。(三五〇三三〇信。『魯迅全集』第十三卷)

十冊の稿本はこうして束ねられたまま魯迅の死を迎えた。そしてその後、一九三八年、魯迅全集出版社が最初の全集を刊行したとき、はじめてその第八卷に『會稽郡故書雜集』とともに収録されて日の目を見た。以後『鈞沈』はこの全集版の紙型によって流布する。人民共和國成立後の一九五一年以降もやはり同じ紙型を使って單行され、香港出版のものもそれを影印したものである。一九五七年に二度目の全集が出るが、そこには収録されない。一九七三年になって三度目の魯迅全集が刊行された。この全集は頁數から行數字數に至るまですべて一九三八年版全集の體裁に倣った無注本である。三八年版そっくりそのままの形で復刊したのには、前回五七年版十卷本全集の編集方法、注釋を否定するという極めて政治的な意圖があつたと推測される。しかしこの全集の第八卷、なかでも『古小説鈞沈』に限っていえば、初版に見られた出典の卷數の誤りを原典に當って訂したり、標點の誤りを改めるなど、文革中の仕事にしては極めてまっとうな作業ぶりで、當時の狀況のただ中でこういう地道な仕事を續けていた人がいたのかと思うと、いささか敬意を表したくなる。

新しく一九八一年に刊行された全集には收集校訂したものや翻譯を含まないので、いま通行するのは結局、三八年版と七三年版のいずれも全集版ということになる。唐以前の古小説研究の基本的資料としてたえず引用される割には、出版の上ではそれ相當の待遇を受けているようには思われない。また七三年版全集本の校訂はあるものの、魯迅自身あらためての整理が必要だと言ひ残したにもかかわらず、本文に渉る校訂はまだ聞かない。日本でもかつて前野直彬氏等のグループが手を著けられたということだが、その後の落着は知らない。わたしのこの作業はいささかなりともその闕を補おうとするものである。蚍蜉撼樹、蚊子負山の憾みは免かれぬけれども。

『鉤沈』はいまだ成書の過程にあって、その編成からして、すでに指摘されるように、いまいちどの整理を必要とするが、ここでは編成についてはしばらく稿本の舊を保ったまま、まず本文の校訂を主な作業とする。校訂には現在利用可能な善本はできるかぎり利用する。むろん個人の作業だから限界があるのはいうまでもない。しかしよりよいと判断したテキストによって『鉤沈』の原文を差換える場合もある。

いまこうした作業にとって、最も待ち望まれるのは『鉤沈』稿本十冊と、六千枚にのぼるといふ『鉤沈』編纂のための條子の公開である。これら手稿の影印出版によって『鉤沈』に關してはかなりのことが判明するはずである。

『鉤沈』の解題、および『鉤沈』引書考は紙幅を考えて稿をあらためる。

一九九二年七月十日。

## 校例

一、『古小説鉤沈』所收の各小説の一條ごとに通し番号を付けて検索の便を計った。また『鉤沈』以前の輯本、たとえば『玉函山房輯佚書』『說郛』等に輯められた當該小説にも各條ごとに排列順に通し番号を附けた。

二、『鉤沈』の雙行注は、魯迅の注も原注もすべて注番号を附けたりえて、校記に編入し、本文は原文のみとした。

三、校記の中で、○印以下はすべて校訂者の注記であり、○印のない部分、また○印以上の文は『鉤沈』の注である。

『鉤沈』注に必要に應じて補足するばあいは、補足部分に「」を付けて『鉤沈』注と區別した。

四、『鉤沈』が依據した書物の名は、もと原則として全體を覆うものは文末にあり、一部を引くものは文中の當該箇所  
に記されていたが、校本では一括して校記の冒頭に移し、かつ一部を引く書については書名に＊印を附けた。そして

その後に○印を付け、校訂者が調べた、他の依據するに足る書物、および後代の收録書の名を列舉した。

五、注記の番号は原則として句末に附けた。

六、校勘は異體字には及ばない。

七、校勘に用いた各種版本は、別に列舉すると相當の紙幅を食うので、できるだけ校記の中で示すようにした。

八、同話や類話は備忘のために附記したまでで、もとより博搜網羅したものではない。

九、『鉤沈』原文の後に、新收の佚文および疑義ある佚文を○印ならびに通し番号を附けて加え、注記を施した。

### 古小説鉤沈序

小説者、班固以爲出於稗官、閭里小知者之所及、亦使綴而不忘、如或一言可采、此亦芻蕘狂夫之議。是則稗官職志、將同古采詩之官、王者所以觀風俗知得失矣。顧其條最諸子、判列十家、復以爲可觀者九、而小説不與。所錄十五家、今又散失。惟大戴禮引有青史氏之記、莊子舉宋鉞之言、孤文斷句、更不能推見其旨。去古既遠、流裔彌繁、然論者尙墨守故言、此其持萌芽以度柯葉乎。余少喜披覽古說、或見訛<sup>レ</sup>、則取證類書、偶會逸文、輒亦寫出。雖叢殘多失次第、而涯略故在大共。貞語支言、史官末學、神鬼精物、數術波流。真人福地、神仙之中騁、幽驗冥徵、釋氏之下乘。人間小書、致遠恐泥、而洪筆晚起、此其權輿。況乃錄自里巷、爲國人所白心。出於造作、則思士之結想。心行曼衍、自生此品、其在文林、有如舜華、足以麗爾文明、點綴幽獨、蓋不第爲廣視聽之具而止。然論者尙墨守故言。惜此舊籍、彌益零落、又慮後此間暇者尠、爰更比輯、並校定昔人輯本、合得如干種、名曰古小説鉤<sup>レ</sup>沈。歸魂故書、卽以自求說釋、而爲談

大道者言、乃曰、稗官職志、將同古來采詩之官、王者所以觀風俗知得失矣。

校記 この序文は一九一二年二月『越社叢刊』第一集に周作人の名で發表され、『古小説鉤沈』成書の時期を推定する有力な證據の一である。一九三八年版全集『古小説鉤沈』には收録されず、一九四六年の『魯迅全集補遺』にはじめて收められ、一九八一年版全集第十卷『古籍序跋集』に再録。いまそれに據る。手稿一頁が原存という。

(一)○全集補遺「訛」作「僞」。(二)○全集補遺「鈎」作「拘」、題目亦同。日記一九二二年一〇月一二日、又一二月二三日以及書信三五〇三三〇亦作「拘」。

### 青史子 凡三條

1 古者胎教之道<sup>(一)</sup>、王后腹之七月而就宴室<sup>(二)</sup>、太師持銅而御戶左<sup>(三)</sup>、太宰持斗而御戶右<sup>(四)</sup>、太卜持蓍龜而御堂下<sup>(五)</sup>、諸官皆以其職御於門內<sup>(六)</sup>。比及三月者<sup>(七)</sup>、王后所求聲音非禮樂<sup>(八)</sup>、則太師縉瑟而稱不習<sup>(九)</sup>。所求滋味者非正味<sup>(一〇)</sup>、則太宰倚斗而不敢煎調<sup>(一一)</sup>。而言曰<sup>(一二)</sup>、不敢以待王太子<sup>(一三)</sup>。太子生而泣<sup>(一四)</sup>、太師吹銅曰<sup>(一五)</sup>、聲中某律。太宰曰<sup>(一六)</sup>、滋味上某。太卜曰<sup>(一七)</sup>、命云某。然後爲王太子懸弧之禮義<sup>(一八)</sup>。東方之弧以梧<sup>(一九)</sup>、梧者、東方之草、春木也、其牲以雞<sup>(二〇)</sup>、雞者、東方之牲也。南方之弧以柳<sup>(二一)</sup>、柳者、南方之草、夏木也、其牲以狗<sup>(二二)</sup>、狗者、南方之牲也。中央之弧以桑<sup>(二三)</sup>、桑者、中央之木也、其牲以牛<sup>(二四)</sup>、牛者、中央之牲也。西方之弧以棘<sup>(二五)</sup>、棘者、西方之草也、秋木也、其牲以羊<sup>(二六)</sup>、羊者、西方之牲也。北方之弧以棗<sup>(二七)</sup>、棗者、北方之草、冬木也、其牲以麋<sup>(二八)</sup>、麋者、北方之牲也。五弧五分矢<sup>(二九)</sup>、東方射東方<sup>(三〇)</sup>、南方射南方<sup>(三一)</sup>、中央射中央<sup>(三二)</sup>、西方射西方<sup>(三三)</sup>、北方射北方<sup>(三四)</sup>、皆三射<sup>(三五)</sup>。其四弧具其餘各二分矢<sup>(三六)</sup>、懸諸國四通門之左<sup>(三七)</sup>、中央之弧亦具餘二分矢<sup>(三八)</sup>、懸諸社稷門之左<sup>(三九)</sup>。然後卜王太子名<sup>(四〇)</sup>。上無取於天<sup>(四一)</sup>、下無取於墜<sup>(四二)</sup>、中

無取於名山通谷<sup>(一八)</sup>、無拂於鄉俗<sup>(一九)</sup>。是故君子名難知而易諱也。此所以養恩之道也。<sup>(二〇)</sup>

校記 大戴禮記三保傳篇。賈誼新書十胎教雜事。○ともに「青史氏之記曰」として引く。明楊慎『丹鉛餘錄』五、又『丹鉛總錄』四。天中記五一。胡應麟『小室山房筆叢』二九引。その後の輯佚に『玉函山房輯佚書』の『青史子』二則、『佚禮扶微』（『南菁書院叢書』）二の二則があり、後者は『賈誼新書』より「王太子懸弧之禮義」から「懸諸社稷門之左」までを録する。

(一)「之道」二字依新書引補。(二)新書引作「王后有身之七月而就蓂室」。(三)○「太師」鉤沈本作「太史」、新書作「太師」。孔廣森大戴禮記補注云、「師宋本譌史、从通解改。」汪中大戴禮記正誤亦云、「案大師盧刻作太史、戴氏文集曰、當作太師、注同。戴校聚珍本云、各本訛作史、今據通解訂正。孔本亦作太師。此改大師、蓋用其說。」盧刻即雅雨堂本作「太史」、但下皆作「太師」。鉤沈依此「太史」而下皆改爲「太史」、誤。今據改。(四)○「斗」、孔注云、「升、盧本依新書作斗、古字字相似、新書寫誤耳。」大戴禮各本皆作「升」、唯雅雨堂本作「斗」耳。新書各本皆作「斗」。(五)「太卜」已下依新書引補。(六)「比及」二字、新書引作「此」。○新書漢魏叢書本、百子全書本俱作「此」、但四部叢刊本、二十二子本並作「比及」二字。(七)新書引作「撫樂」。(八)新書引無「者」。○百子全書本亦無、漢魏叢書本空一格、但四部叢刊本、二十二子本俱有。(九)新書引有已上五字、又「倚」作「荷」。(一〇)新書引無「言」字。(一一)新書引作「侍」。○二十二子本盧文昭校語云、「潭本侍作待、大戴禮同。」潭本即宋長沙刊本也。(一二)○「泣」、盧文昭校語云、「建本作立、亦當讀爲泣。」四部叢刊本作「立」。(一三)○「射中央」、二十二子本作「高射」、盧校語云、「潭本別本俱作中央射中央、今從建本。」建本即宋建寧府刊本。(一四)「太卜曰」至此、已上依新書引補。○胡應麟少室山房筆叢二九引青史子云、「青史子云、古禮、男子生而射天地四方。其文云、東方之弧

以梧、梧者東方之草、春木也。南方之弧以柳、柳者南方之草、夏木也。中央之弧以桑、桑者中央之木也。西方之弧以棘、棘者西方之草、秋木也。北方之弧以棗、棗者北方之草、冬木也。」(一一五)大戴禮記引作「然後卜名」。(一一六)[無]新書引作「毋」、下放此。○新書四部叢刊本無「於」。(一一七)[墜]新書引作「地」。○盧校語云、「建、潭本作土、今從別本、與大戴同。」四部叢刊本亦作土。(一一八)○新書盧校語云、「別本句首有中字、與大戴同。」四部叢刊本無「中字」。(一九)[拂]新書引作「悖」。(二〇)[思]新書引作「息」。新書引有「也」字。○盧校語曰、「建、潭本無名字、而字、此所以字。別本皆有、與大戴同。又思字、建、潭本作隱、別本作息。」四部叢刊本與建、潭本同。玉函依新書引有「正之者禮王太子無羞臣領臣之子也故謂之領臣之子也身朝王者妻朝后之子也是謂臣之子也此正禮胎教也」、盧校語云、「此段文訛誤、難曉。」案蓋此是新書之文也。

2 古者年八歲而出就外舍、學小藝焉、履小節焉。束髮而就大學、學大藝焉、履大節焉。居則習禮文、行則鳴珮玉、升車則聞和鸞之聲、是以非僻之心無自入也。在衡爲鸞、在軾爲和。馬動而鸞鳴、鸞鳴而和應。聲曰和、和則敬、此御之節也。上車以和鸞爲節、下車以珮玉爲度、上有雙衡、下有雙璜、銜牙珌珠以納其閒、琚瑀以雜之、行以采芡、趨以肆夏、步環中規、折還中矩、進則揖之、退則揚之、然后玉鏘鳴也。古之爲路車也、蓋圓以象天、二十八牀以象列星、軫方以象地、三十輻以象月。故仰則觀天文、俯則察地理、前視則睹鸞和之聲、側聽則觀四時之運、此巾車教之道也。

校記 大戴禮記三保傳篇。○玉函。

『新書』六容經云、古者年九歲入就小學、跟小節焉、業小道焉。束髮就大學、跟大節焉、業大道焉。是以邪放非辟無因入之焉。／古者聖王居有法則、動有文章。位執戒輔、鳴玉以行。鳴玉者佩玉也。上有雙珩、下有雙璜、銜牙蠙



珠、以納其間、瑀瑀以櫛之。行以采薺、趨以肆夏、步中規、折中矩。登車則馬行而鸞鳴、鸞鳴而和應、聲曰和、和則敬。」二十二字抱經堂校定本。

(一)○舊注「玼亦作璫」。(二)○舊注「揖一作厭」。(三)○盧辨注云、「自青史氏已下太子之事也」。

3 鷄者、東方之牲也。歲終更始、辨秩東作、萬物觸戶而出、故以雞祀祭也。

校記 風俗通義八。○「青史子書說」として引く。佚禮扶微二。王仁俊玉函山房輯佚書續編又引佚禮扶微。王應麟が『漢志考證』等で『風俗通義』引と指摘したものである。

## 裴子語林

鈎沈一七五條、新附七條、凡一八二條

1 樓護字君卿、<sup>(一)</sup>歷游五侯之門。每旦五侯家各遺餉之。<sup>(二)</sup>君卿口厭滋味、乃試合五侯所餉之鯖而食甚美。<sup>(三)</sup>世所謂五侯鯖、君卿所致。<sup>(五)</sup>

校記 廣記二百三十四。書鈔一百四十五。○天中記四六(庫本。以下同)。淵鑑類函(原刊本。以下淵鑑と略稱する)三八九鯖。玉函山房輯佚書(以下玉函と略稱する)151。周楞伽輯注裴啓語林2(一九八八年・文化藝術出版社本。以下周氏と略稱する)。同話は『世說』(今本『世說』不錄)『西京雜記』があり、ともに『廣記』(特に注記しない限り中華書局排印本)二三四に引く。

(一)○書鈔(孔氏校注重刊景印本)「婁」作「樓」、據『漢書』遊俠傳當作「樓」。(二)○書鈔無「家各」二字。  
(三)○書鈔無「口厭滋味」四字。(四)○書鈔無「試」字、又無「甚」字。(五)書鈔引作「君卿之爲也」。

2 胡廣本姓黃、五月生、父母置諸甕中、投之於江。胡翁見甕流下、聞有小具啼聲、往取、因以爲子。遂登三司。廣後不治本親服、世以爲譏。

校記 御覽三百八十八。御覽四百八十八。○玉函108。周氏4。同話は鈎沈『小説』57。また『御覽』三一、三六一『世說』(今本『世說』不錄)。類話は『御覽』三一『孝子傳』紀邁、『宋書』王鎮惡、『史記』田文、三六一に『西京雜記』王鳳、『宋略』王鎮惡、『異苑』田文があり、王鳳、王鎮惡、田文の話は『歲時廣記』二二にも引かれる。

(一)○三八八無「胡翁見甕」四字。(二)○鮑本三八八「聞」上有「胡」字。(三)○四八八引至此爲止。

3 張衡之初死、蔡邕母胎孕、此二人相貌相類、時人云、邕是衡之後身。

校記 御覽三百六十、又三百九十六。六帖二十一。○白氏事類集(文物出版社景宋本)七。天中記三九。淵鑑(原刊本)二六一形貌、又三二一。玉函99。周氏5。同話は鈎沈『小説』68。

(一)○六帖、三九六俱無「之初」二字。(二)○六帖「胎孕」二字作「始孕」、三九六作「始懷孕」三字、中華書局本三六〇無「胎」字、鈎沈據鮑本。「始」字當補。(三)○六帖無「此」字。六帖、三九六「人」作「子」。三九六「相」上有「甚」字。六帖「類」作「似」。(四)○六帖「衡之」作「張衡」。

4 陳元方遭父喪、形體骨立<sup>(1)</sup>、其母哀之<sup>(2)</sup>、以錦被蒙其上<sup>(3)</sup>。郭林宗往弔、見錦被而責之<sup>(4)</sup>。賓客絕百許日。

校記 御覽五百六十一、又八百十五。事類賦注十。○天中記四九。淵鑑一八二。玉函138。周氏6。同話は『世說』規箴篇(余嘉錫『世說新語箋疏』。數字は同書檢索番号、以下同)。3。類話は次條5。

(一)○事類賦注(中華書局景宋本)、御覽八一五皆無「形體」二字。(二)○鉤沈「母」上脫「其」字。御覽、事類賦注俱有、因今補。「哀」字、事類賦注、御覽八一五作「慙」。(三)○御覽五六一無「被」字。(四)○事類賦注、御覽八一五俱無「錦被」二字。

5 傅信字子思、遭父喪、哀慟骨立、母憐之、竊以錦被蒙其上。林宗往弔之、見被、謂之曰、『卿海內之儒、四方是則。如何當喪、錦被蒙上。』郭奮衣而去。自後賓客絕百許日。

校記 御覽七百七。○天中記四八。淵鑑三七八被。玉函137。周氏7。類話は前條4。

6 傅信<sup>(1)</sup>忿母、母羸病恆驚悸、傅信乃取雞鳧滅毛<sup>(2)</sup>、施於承塵上、行落地、母輒恐怖<sup>(3)</sup>。

校記 書鈔一百三十二。御覽七十一、又九百十九。○天中記四九。玉函62。周氏8。『玉函』は出處を「北堂書鈔卷一百三十二、太平御覽卷七百一又卷九百五十一(また九百五ととも)」とするが、「九百五十一」は「九百十九」でなければならず、『鉤沈』がもと同様に「九百五十一」とするのは、『玉函』を襲ったことの一證となる。

(一)二字御覽一引作「貧」。○「忿母」、御覽九一九作「貧」。鉤沈「二」本作「一」、一九七三年版全集已訂爲「二」。  
(二)○御覽皆無「傳」字、又「鳧」作「鴨」。御覽七〇一「滅」作「去」。(三)○御覽九一九「施」作「放」、七〇

一「施於」作「置」。(四)○御覽九一九「輒」作「轉」、鮑本無「母」字。

7 鄭玄在馬融<sup>(二)</sup>門下、三年不得見、令高足弟子傳授而已。融嘗算渾天不合、召鄭玄令一算、便決、衆咸駭服<sup>(五)</sup>。及玄業成辭歸、融心忌焉<sup>(六)</sup>。玄亦疑有追者、乃坐橋下、在水上據屐<sup>(九)</sup>。融果轉戒、欲救追之<sup>(二)</sup>、告左右曰、「玄在土水上據木、此必死矣。」遂能追<sup>(三)</sup>。竟以免。

校記 御覽六百九十八。＊御覽三百九十三。＊御覽七百五十。○記纂淵海(中華書局景宋本)七八。天中記四八。淵鑑三七五履。玉函四四。玉函誤作「御覽七十五」とするのを鈎沈訂さず襲う。周氏9。同話は『世說』文學篇1。

(一)○御覽七五○無「在」字。(二)○御覽三九三無以上三句。(三)○三九三「融」上有「馬」、無「嘗」。中華書局本七五○「嘗算」作「算嘗」、又脫「不」字、皆誤也。(四)○七五○無「鄭」字、「一算」作「算一轉」、三九三作「算一算」。(五)○三九三無此一句四字。七五○引至此爲止。(六)○六九八無「三年」以下至「及玄」。(七)○六九八「焉」作「之」。(八)○六九八「玄」上有「鄭」、又無「者」。(九)○六九八無「在水上」三字。(一〇)○六九八「戒」作「式」。(一一)○六九八無「欲救」二字。(一二)○六九八「土」、中華書局本作「上」、鮑本作「橋」皆誤、「上」下有「而」字。(一三)○六九八句末、中華書局本有「矣」字。三九三引自「馬融算渾天不合」至此爲止。

8 孔嵩字仲山、南陽人也、少與潁川荀彧未冠時共遊太學<sup>(二)</sup>。彧後爲荊州刺史、而嵩家貧、與新野里客傭爲卒。彧時出、見嵩、下駕、執手曰、「昔與子搖扇俱遊太學、今子爲卒、吾亦痛哉」彧命代嵩、嵩以傭夫不去。其歲寒心若此。嵩後三府累請、辭不赴<sup>(五)</sup>。後漢時人。

校記 類林雜說五。案首尾皆王朋壽語。○永樂大典一二〇一七云唐語林。「唐」衍字。周氏10。

(一) ○大典此句引作「少未冠、與潁川荀彧共遊太學」。(二) ○大典「昔」作「共」。(三) ○大典無「爲」。(四) ○大典「請」作「辟」。(五) ○大典無「辭」。(六) ○大典「後漢」作「後漢末」。

9 魏郡太守陳異嘗詣郡民尹方、方被頭以水洗盤、抱小兒出、更無餘言。異曰、「被頭者、欲吾治民如理髮。洗盤者、欲使吾清如水。抱小兒者、欲使吾愛民如赤子也。」

校記 御覽三百六十四。○淵鑑二五九頭。玉函100。周氏11。

(一) ○鉤沈「欲」下脫「使」字、今補。玉函亦脫。

10 孫策年十四、在壽陽詣袁術、始至、俄而外通、劉豫州備來。孫便求去、袁曰、「劉豫州何關君。」荅曰、「不爾、英雄忌人。」即出、下東階、而劉備從西階上。但得轉顧視孫、足行殆不復前矣。

校記 御覽三百八十五。廣記一百七十四。續談助(十萬卷樓叢書本、粵雅堂叢書本)四。○鉤沈『小說』105。天中記五八。玉函105。周氏12。

(一) ○廣記「孫」上有「吳」。(二) 「在壽陽」三字廣記引有。○續談助引亦有。(三) 二字廣記引有。○續談助亦同。(四) ○廣記無「外通」二字。續談助此句四字作「而」一字。(五) ○御覽無「備」字。廣記「來」作「到」。續談助亦無「備」、「來」作「到」。(六) ○廣記、續談助俱無「孫」字。(七) 御覽引作「何若」。○續談助無「劉」。(八) 二字廣記引有。○續談助無。(九) ○鉤沈本作「東」、各本皆作「西」、七三年版全集已訂之。(一〇) 廣記引作「但轉顧

視係之行歩」。○鉤沈注在行字下。玉函亦同。續談助引作「但輒顧視之行」。廣記、續談助皆無「矣」。

11 管寧嘗與華子魚少相親友。共園中鉏菜、見地有片金、揮錘如故、與瓦石無異。華提而擲去。

校記 初學記十七。○五朝小說1（上海文藝出版社）。玉函89。周氏13。同話は『世説』德行篇11前半。『廣記』二三管寧、引きて『世説』に出づと云い、又た『殷芸小説』に出づと云う。鉤沈『小説』未だこれを收めない。

（一）○中華書局本「錘」作「鉏」、玉函亦同。蘊石齋本亦作「鉏」。

12 諸葛武侯與宣王在渭濱、將戰、宣王戎服莅事、使人觀武侯、乘素輿、著葛巾、持白羽扇、指麾三軍、衆軍皆隨其進止。宣王聞而歎曰、『可謂名士矣』

校記 書鈔一百四十。類聚六十七。御覽三百七、又七百七十四。＊書鈔一百十八、又一百三十四。御覽七百二。＊初學記二十五。六帖十四。事類賦注十四。○白氏事類集四。草堂詩箋（古逸叢書本）二四、又三四。事文類聚（中文出版社景明本）續集二八。天中記二五、又四九。五朝小說10。淵鑑一二二攻戰、又三七三巾、又三七九扇、又三八七輿。玉函49。周氏14。同話は『殷芸小説』（『類説』引。鉤沈失收）に見える。

初學記二五云、諸葛武侯持白羽扇、指麾三軍。

『白帖』、『六帖』（新興書局景明本）、『草堂詩箋』、『事文類聚』は基本的に『初學記』と同じ。『事類賦注』は「武侯」下に「與晉宣帝戰於渭濱乘素輿著葛巾」を引く。校勘には以上の諸本を取らない。

（一）○「諸葛」二字、書鈔一一八、御覽七七四無。「宣王」上御覽三〇七有「司馬」二字。類聚「王」作「皇」、下

倣此。(二)○書鈔一三四無「宣王」以下至「觀」九字、御覽七〇二亦同。書鈔一一八、一四〇、御覽三〇七、七七四皆「觀」作「視」。(三)○書鈔一一八「乘」作「秉」、誤。又無「著葛巾」三字。類聚同。書鈔一三四、一四〇、御覽七〇二俱無「著」字。御覽三〇七、二句六字作「素與葛巾」四字、御覽七七四作「乘與葛巾」四字。鈎沈據事類賦注補「著」字。(四)○類聚此句四字作「毛扇」二字。御覽七〇二無「持」、七七四鮑本作「將」。三〇七作「白毛扇」。(五)已上亦見初學記、六帖、事類賦注。(六)○書鈔一四〇、類聚、御覽三〇七、七七四俱無「衆軍」。御覽七〇二作「三軍」。書鈔一一八「衆軍皆」作「並」。書鈔一三四、又一一八、御覽七〇二皆引至此止。(七)○御覽七七四中華書局本「王」作「皇」。(八)○「矣」字據類聚補、他本無。

13 蜀人伊籍稱吳土地人物云、『其山崑崙以嵯峨、其水沔淥而揚波、其人磊呵而英多。』

校記 世說言語篇、王武子孫子荆各言其土地人物之美云云。注云、案三秦記語林載蜀人伊籍稱吳土地人物、與此語同。今据以改寫。○玉函1。周氏15。玉函案語云、「劉義慶世說新語言語篇、王武子孫子荆各言其土地人物之美、孫云云。劉峻注、按三秦記語林載蜀人伊籍稱吳土地人物、與此語同。據補。」

14 孫休好射雉、至其時、則晨往夕還。羣臣莫不上諫曰、『此小物、何足甚耽。』荅曰、『雖爲小物、耿介過人、朕之所以好也。』

校記 廣記四百六十一。○天中記五八。玉函153。周氏16。同話は『世說』規箴篇4。

15 豫章太守顧劭、是丞相雍之子、在郡卒。時雍方盛集僚屬圍碁、外信至而無兒書。雖神意不變、而心了有故。賓客既

散、方歎曰、『已無延州之遺累、寧有喪明之責邪。』於是豁情散哀、顏色自若。

校記 御覽七百五十三。○玉函14。周氏17。同話は『世説』雅量篇1。

(一)○中華書局本「了」作「料」。

16 魏武云、『我眠中不可妄近、近輒斫人不覺、左右宜慎之。』後乃陽凍眠、所幸小兒竊以被覆之、因便斫殺。自爾莫敢近之。

校記 御覽七百七。○天中記四八。玉函136。周氏18。同話は『世説』假譎篇4。また鉤沈『小説』14(廣記一九〇引)、『記纂淵海』五八。

17 魏武將見匈奴使、自以形陋、不足雄遠國、使崔季珪代當坐、乃自捉刀立牀頭。坐既畢、令人問曰、『魏王何如。』使荅曰、『魏王信自雅望非常、然牀頭捉刀人、此乃英雄也。』魏王聞之、馳遣殺此使。

校記 御覽七百七十九、又四百四十四。○鉤沈『小説』15(廣記一六九)。玉函117。周氏19。同話は『世説』容止篇1。

(一)○四四四無「當坐」二字。(二)○七七九無「乃」字、「立」字。(三)○四四四「令人」作「使僕」。七七九無「問」。(四)○七七九中華書局本「自」作「曰」、誤。鮑本作「是」。(五)○四四四無「也」字。(六)○七七九中華書局本無「之」字。

18 楊脩字德祖、魏初弘農華陰人也、爲曹操主簿。曹公至江南、讀曹娥碑文背上別有八字、其辭云、『黃絹幼婦、外孫蒜曰。』



曹公見之不解、而謂德祖、<sup>(八)</sup>『卿知之不。』<sup>(九)</sup>德祖曰、『知之。』曹公曰、『卿且勿言、待我思之。』<sup>(一〇)</sup>行卅里、曹公始得、令祖先說。祖曰、『黃絹色絲、<sup>(一一)</sup>「絕」字也。幼婦少女、<sup>(一二)</sup>「妙」字也。外孫女子、<sup>(一三)</sup>「好」字也。蒜曰受辛、<sup>(一四)</sup>「辡」字也。謂「絕妙好辡」曹公嘆曰、『實如孤意。』俗云有智無智隔卅里、此之謂也。

校記 琬玉集十二。學林七。案學林云出魏志注、今未見之。\*草堂詩箋三十一。\*類林雜說四。○古文苑一九邯鄲淳曹娥碑注。記纂淵海一二。玉函山房輯佚書補編（引琬玉集）。周氏21。同話は『世說』捷悟篇3。李瀚『蒙求注』（文化十一年勵風館刊本『舊注蒙求』）卷上。敦煌文書S.一三三。類話に鈎沈『小說』75、『異苑』十卷本一〇。

『古文苑』一九邯鄲淳曹娥碑注云、

語林。楊脩至江南、讀曹娥碑、碑背有八字、曰黃絹幼婦外孫齷曰。曹操不解、問脩曰、卿知否。脩曰、知之。操曰、且勿言、待孤思之。行三十里、乃得之。令脩解。脩曰、黃絹色絲、色絲絕字、幼婦少女、少女妙字、外孫女子、女子好字、齷曰受辛、受辛辡字。操曰、一如孤意。四部叢刊本。

『記纂淵海』一二云、

楊脩爲丞相曹操主簿。至江南、讀曹娥碑、上有八字。問脩、脩曰知之。操曰、待朕思之。行三十里、乃得之。令脩解。脩曰、黃絹色絲、絕字。幼婦少女、妙字。外孫女子、好字。齷曰受辛、辡字。操曰、一如朕意。俗云有智無智校三十里。裴啓語林。中華書局景宋本。

『類林雜說』四云、

楊修字德祖、爲魏主曹操主簿。與魏主俱至汝南。讀曹娥碑、碑背有八字、云、黃絹幼婦外孫齷曰。魏主讀之、不解其義。乃問脩曰、解否。脩曰、臣略小解。上曰、卿若解、且勿言、待朕思之。行三十里、魏主始得、乃問。脩曰、臣得

久矣。黃絹色絲、色絲絕字、幼婦少女、少女妙字、外孫女子、女子好字、癯曰受辛、受辛辭字。魏主大笑、卿意如朕意。有智無智校三十里。事出語林。」嘉業堂叢書本。

(一) 學林引無已上十一字。○草堂詩箋亦同。(二) 學林「爲」下有「魏主」二字。(三) 學林、詩箋俱無「曹公」二字。(四) 學林「文」作「碑」、接下而讀。古文苑、詩箋皆同。(五) 詩箋、學林俱無「上別」二字。詩箋「背」作「陰」。(六) 學林三字作「詞曰」二字、古文苑、詩箋都作「曰」一字。(七) 〔蒜曰〕學林引作「齏曰」、下放此。草堂詩箋三十一節引、「蒜」亦作「齏」。○詩箋、「偶題詩」。以下至「待我思之」爲止、作「操不能解脩知之」。(八) 學林此二句作「操不解問脩曰」六字、「曹公」作「操」、「德祖」作「脩」、下皆倣此。(九) 學林「之不」作「否」。(一〇) 學林無「卿」、「我」作「朕」。(一一) 學林四字作「乃得之」、詩箋作「乃悟」。(一二) 學林、詩箋六字作「令脩解曰」。(一三) 詩箋、「色絲」下重有「色絲」二字、無「也」字。下三解語法並同。○學林、古文苑、類林雜說皆同。(一四) 學林、古文苑、類林雜說並無五字。(一五) 詩箋無此句四字。學林只作「操曰」。(一六) 學林此句作「一如朕意」、詩箋作「操意與合」、古文苑作「一如孤意」。(一七) 詩箋「俗」作「語」。(一八) 學林引作「校」、詩箋亦作「校」。類林雜說四引與詩箋同。○本在「隔」字下。

19 董昭爲魏武帝重臣、後失勢。文明世、入爲衛尉、昭乃厚加意於侏儒。正朝大會、侏儒作董衛尉啼、面言昔太祖時事、舉坐大笑、明帝悵然不怡、月中以爲司徒。

校記 御覽四百八十八。又三百九十一。○續談助四、鈞沈『小說』92。淵鑑二六七笑。玉函11?。周氏22。

(一) 御覽三百九十一引作「董昭失勢久爲衛尉」。○續談助「入」作「下」。(二) 玉函、鈞沈俱脫「昭」字、各本

並有、今補。(三)○御覽三九一言作「叙」、無「昔」字。(四)○御覽四八八無「以」字、續談助「以」作「遷」。

20 何晏字平叔、以主婿拜駙馬都尉。<sup>(三)</sup>美姿儀、面絕白、魏文帝疑其著粉。<sup>(四)</sup>後正夏月、喚來、與熱湯餅。<sup>(五)</sup>既啖、大汗出、<sup>(六)</sup>隨以朱衣自拭、色轉皎潔、帝始信之。

校記 初學記十九、又二十六。書鈔一百二十八、又一百三十五。御覽二十一、又一百五十四、又三百六十五、又三百七十九、又三百八十七、又八百六十。事類賦注四。鈎沈注云、類林雜說九引作、何晏字平叔、兒甚潔白、美姿容。明帝見之、謂其著粉。因命晏賜之湯餅。汗出流面、以巾拭之、轉見皎然。帝方信。○敦煌文書P.二六三五。書鈔一四四節引。御覽六九〇。事物紀原(中華書局本)九節引。五朝小說5。淵鑑二五九面、三七一朱衣、三八一粉、三八九餅。玉函57。周氏23。同話は『世說』容止篇2、但し魏明帝とする。敦煌文書P.二五二四、又S.七八。また『瑠玉集』一四『魏志』引、李瀚『蒙求注』中。

P.二六三五引語林云、何晏字平叔、爲人白哲姿容。魏明帝見之、謂其著粉臣、命晏賜之熱餅。晏食餅、汗出流面、以巾拭之、轉白皎然。帝方始信。

(一)○初學記、書鈔、御覽二一、三七九、六九〇、八六〇、事類賦注俱作「何平叔」三字。御覽三八七無「字平叔」三字。(二)已上依御覽一百五十四引。(三)○御覽六九〇、又八六〇俱無「美姿儀」三字。書鈔一二八、御覽除三七九以外皆「儀」作「容」。(四)○御覽一五四、三六五、通行本事類賦注無此一句。初學記一九、御覽二一、三七九、宋本事類賦注「面」作「而」。宋本事類賦注「絕白」作「絕潔白」。(五)○唯御覽三八七「魏文帝」作「明帝」、一五四、三六五作「帝」。他皆作「魏文帝」。御覽一五四「疑」上有「每」字、「疑」下無「其」字。御覽二一、宋本事類賦注

亦無「其」字。書鈔、御覽一五四、三六五、三八七、事類賦注皆「著」作「傳」、御覽二一作「傳以」二字。(六)○初學記一九、書鈔一二八、御覽二一、六九○俱無「後正」二字。書鈔一三五、御覽一五四無「正」字、御覽八六○無「後」字。書鈔一三五、御覽六九○「夏月」作「夏日」、事類賦注作「夏」一字。御覽三六五、三八七並無此句。(七)○初學記一九、書鈔、御覽二一、一五四、三六五、三七九、三八七、事類賦注俱無「喚來」二字。御覽六九○作「喚、無「來」字。(八)書鈔引作「以麪噉」「一三五作食」之。御覽「一五四」引作「賜以湯餅」。○御覽二一、三七九引與鈎沈同。八六○無「既啖」二字。六九○作「與熱餅既噉」、三六五作「賜湯餅令晏食之」。三八七作「賜之湯餅晏食之」。初學記二六作「與熱餅噉之」。事類賦注「啖」作「食」、清本「與」作「賜」。(九)○初學記二六、御覽三六五、三八七無「大」字。御覽三六五、三八七「出」下皆有「流面」二字。P.二六三五亦有。(一〇)○御覽一五四無「隨」、「拭」下有「之」字。書鈔「自拭」作「拭面」。御覽三六五此句六字作「拭之」、三八七作「以巾拭之」。(一一)○書鈔「色」上有「而顏」二字、句末有「也」字、一三五無「轉」字。御覽三六五此句四字作「轉白」二字、一五四作「尤皎然」。『潔』、唯初學記二六作「潔」、他皆作「然」。初學記一九、書鈔、御覽二一、一五四、三六五、三八七、八六○、事類賦注皆引至此爲止。(一二)○唯初學記二六、御覽六九○有末一句、而御覽「帝」上有「時」字。P.二六三五亦有「帝方始信」一句。

21 辛恭靜見司馬太傅、問卿何處人。荅曰、『西人。』太傅應聲戲之曰、『在西頗見西王母不。』恭靜荅曰、『在西乃不見西王母、過東已見東王公。』太傅大愧。

校記 類聚二十五。○淵鑑二九九嘲戲。天中記二六。玉函75。周氏168。周氏『語林』は「辛恭靜」を「辛恭靖」の訛

誤とし、「司馬太傅」を「司馬道子」に比定、東晉の事として鉤沈150桓野王の後に移す。

22 夏侯太初從魏帝拜陵、陪列松柏下、時暴雨霹靂、正中所立之樹、冠冕焦壞、左右覩之皆伏、太初顏色不改。景王欲誅夏侯玄、意未決、問問安王孚云、『己才足以制之否。』孚云、『昔趙儼葬兒、汝來、半坐迎之。泰初後至、一坐悉起。以此方之、恐汝不如。』乃殺之。

校記 \*世說雅量篇「3」注。\*續談助四。○鉤沈『小説』96。玉函6。但し『世說』注を引くのみ。此の條、『世說』注と『續談助』をつなぎ合せたもの。『類說』四九。周氏24・25。

(一) ○世說無「夏侯」二字、鉤沈以意補之。(二) 世說注引至此。(三) ○「否」鉤沈本作「不」、今據續談助訂之。(四) 十萬卷樓叢書本續談助「泰」作「太」。鉤沈據粵雅堂叢書本引。

23 王經少處貧苦、仕至二千石、其母語之、『汝本寒家兒、仕至二千石、可止也。』經不能止。後爲尚書助魏、不忠於晉被收。流涕辭母曰、『恨昔不從敕、以致今日。』母無戚容、謂曰、『汝爲子則孝、爲臣則忠、有何負哉』

校記 御覽四百四十一。○玉函116。周氏26。同話に『世說』賢媛篇10。

(一) ○「之」、鉤沈本作「云」、玉函亦作「云」。今據中華書局本、鮑本改。(二) ○中華書局本「何」作「可」。

24 劉靈字伯倫、飲酒一石、至醒復飲五斗。其妻責之、靈曰、『卿可致酒五斗、吾當斷之。』妻如其言。靈呪曰、『天生劉靈以酒爲名、一飲一石、五斗解醒、婦人之言、慎莫可聽。』

校記 類聚七十二。類林雜說〔七〕。○淵鑑三九二酒。玉函87。周氏29。同話に『世説』任誕篇3。敦煌文書P.二五二四宴樂篇、又P.三六三六酒事篇。『蒙求注』中劉伶解醒〔『世説』に據るか〕。又『晉書』劉伶傳、『瑠玉集』一四引『晉抄』。

P.三六三六酒事篇云、

劉靈好飲酒、一飲一石。官至散騎常侍、有奇才、天子重之。其妻責曰、君今官高祿重、而昏迷於糟麴、何以立身。靈謂妻曰、卿可置美酒五斗、并及甘鮓脯、來辰於竈君之前、與卿設盟斷酒。妻喜之無盡、當即排比。及至來朝、劉靈親至竈前、乃爲呪曰、天生劉靈、與酒爲名、一飲一斛、五斗解醒、婦人之語、不足可聽。言訖舉觴、頓飲五斗、渾然下闕。

(一) 類林〔靈〕作「伶」、下同。類林〔倫〕下有「沛國人也」四字。(二) 類林〔至〕下有「醉」字。(三) 類林無〔五斗其〕此三字。(四) 類林〔曰上〕有「謂妻」二字。(五) 類林此下有「并脯羞之類」。(六) 類林此〔當〕下有「呪而」二字。(七) 此四字、類林作「妻信之遂設酒肉致於夫前」。(八) ○類林〔石〕作「傾」。(九) 類林〔莫〕作「不」。類林末有「於是復飲頽然而醉」八字。

25 嵇中散夜燈火下彈琴、忽有一人面甚小、斯須轉大、遂長丈餘、黑單衣阜帶。嵇視之既熟、吹火滅、曰、『吾恥與魑魅爭光。』

校記 類聚四十四。御覽五百七十七、又八百七十六。六帖十四。書鈔一百九。○白氏事類集四。事文類聚續集一八。淵鑑一八八琴、又三六〇燈。玉函56。周氏30。同話は『靈鬼志』(鈎沈7)、『幽明錄』(明鈔說郛卷三、類說一一。鈎沈

校記 水經注十六。御覽七十三。○五色線（津逮秘書本）上。天中記一〇。玉函40。淵鑑三五堰埭。

（一）「日輒」二字御覽引有。「一壺」二字御覽引有。（二）○御覽無「欲」字。（三）○御覽句末有「也」字。

29 胡母彥國至湘州、坐廳事斷官事。爾時三伏中傍搖扇視事。其兒子先從容顧謂曰、『彥國復何爲自貽伊戚。』

校記 御覽七百二。○天中記四九。淵鑑三七九扇。玉函133。周氏35。

（一）○「湘」、鉤沈本據鮑本作「相」、今據中華書局本改爲「湘」。（二）○「伏」、鉤沈本據鮑本作「秋」、今據中華書局本改作「伏」。

30 鄧艾口吃、常云艾艾。宣王曰、『爲云艾艾、終是幾艾。』荅曰、『譬如鳳兮鳳兮、故作一鳳耳。』

校記 御覽四百六十四。○廣記二四五。注云、御覽四六四引作出語林、又四六六引作出世說、文同。宣王を晉文王とする等廣記は世說に近い。玉函119。周氏20。同話は『世說』言語篇17、御覽四六六。明鈔『說郛』六八『釋常談』引。

（一）○廣記「常云」作「語稱」。（二）○廣記「宣王」作「晉文王戲之」五字。（三）○廣記此二句八字作「艾艾爲是幾艾」六字。（四）○廣記無「譬如」二字。（五）○廣記「作」作「是」。

31 鍾士季常向人道、『吾少年時一紙書、人云是阮步兵書、皆字字生義、既知是吾、不復道也。』

校記 續談助四。○鉤沈『小說』99。天中記三七。周氏28。

（一）○十萬卷樓叢書本無「皆」字。

32 滿奮字武秋、體羸惡風、侍坐晉武帝、屢顧看雲母幌、武帝笑之。<sup>(四)</sup>或云、『北窗琉璃屏風、實密似疏。』奮有難色、荅<sup>(五)</sup>曰、『臣如吳牛、見月則喘。』或云、<sup>(六)</sup>是吳質侍魏明帝坐。

校記 御覽七百一。＊類聚六十九。＊書鈔一百三十二。○天中記四九。淵鑑三七六屏風。玉函60。周氏36。同話は鈞沈『郭子』22、『世說』言語篇20。

(一)○類聚此句五字作「滿城武秋」、有訛奪。(二)○御覽無「體」字。(三)○御覽無「晉」字。(四)○御覽無此四字。(五)○類聚「或」作「武」。(六)已上依類聚六十九引。又書鈔一百三十二引云、「晉武帝有琉璃屏風。○」奮字、御覽無之、類聚作「帝」。鈞沈以意改爲「奮」。(七)○御覽有「武帝笑之」四字、鈞沈刪之。(八)○鈞沈本「如」作「爲」、「則」作「而」。玉函亦引作「爲」、「而」。今據御覽訂之。(九)○鈞沈本「云」作「曰」、玉函亦同、今據御覽改。(一〇)○「吳」御覽作「胡」、玉函亦作「胡」、鈞沈以意改爲「吳」。胡質、吳質都是魏人、但吳質有置酒召優使說肥瘦之說(見『魏志』王粲傳注引吳質別傳)、并且吳是魏朝重臣、因而譌訛而生此或說歟。鈞沈亦或據此改爲「吳」歟。

33 孟業爲幽州、其人甚肥、或以爲千斤。武帝欲稱之、難其大臣、乃作一大秤挂壁。業入見、武帝曰、『朕欲試自稱、有幾斤。』業荅曰、『陛下正是欲稱臣耳、無煩復勞聖躬。』於是稱業、果得千斤。

校記 御覽八百三十、又三百七十八。○天中記二一。玉函105。周氏37。同話は『瑠玉集』(古逸叢書本)所引『王隱晉書』、同じくそれを引く『類林雜說』一〇。



(一)〇三七八中華書局本「欲」作「爲」。八三〇「稱」作「秤」、下倣此。(二)〇八三〇無「武」字。(三)〇三七八無「試」字。(四)〇三七八無「正是」二字。(五)〇八三〇「是」下有「遂」字。

34 諸葛觀字仲思、在吳、於朝堂大會、孫皓問曰、『卿字仲思、爲欲何思之。』<sup>(二)</sup>曰、『在家思孝、事君思忠、朋友思信、如斯而已。』

校記 御覽四百六十四。〇玉函118。周氏34。同話は『世說』言語篇21。

(一)〇「爲」字玉函脫之。

35 陳壽將爲國志、謂丁梁州曰、『若可覓斛米見借、當爲尊公爲佳傳。』丁不與米、遂以無傳。

校記 類聚七十二。〇天中記二九、文末云、「時論以此少論。梁州、敬禮子也」。淵鑑三九五米。玉函86。周氏39。

36 校記〇この條は次條と同話。鈎沈は先に通行本『事類賦注』よりこの條を採録、のちまた『文房四譜』より節略の少ない文を收録し後附(37)したが、いまだ整理に及ばないままになったものと思われる。合して一條とすべきである。いま刪つて37に併合する。

37 晉蔡洪赴洛、洛中人問曰、『吳中舊姓何如。』答曰、『吳府君聖朝盛佐、明時之俊父。朱永長理物之宏德、清選之高望。嚴仲弼九臯之鳴鶴<sup>(三)</sup>、空谷之白駒。顧彥先八音之琴瑟、五色之龍章。張威伯歲寒之茂松、幽夜之逸光<sup>(三)</sup>。陸士龍鴻鵠

之徘徊、懸鼓之待槌。此諸君以洪筆爲鋤耒、以紙札爲良田、以玄默爲稼穡、以禮義爲豐年。<sup>(四)</sup>』<sup>(五)</sup>

校記 蘇易簡文房四譜一。事類賦注十五云、蔡洪赴洛、洛中人問之、曰『人皆以洪筆爲鋤耒、以紙札爲良田、以玄默爲稼穡、以禮義爲豐年。』(鈞沈36)

○宋本事類賦注十五、文房四譜と略同、以て底本とする。淵鑑二〇四筆。玉函54、注云、北堂書鈔卷一百四陳禹謨補注。玉函引く所はこの條に略同。周氏37。同話は『世說』賞譽篇20。又敦煌文書P.二五二四古類書人才篇。類話に『文士傳』(御覽四六〇引)、『世說』言語篇22、『晉書』華譚傳。

(一) ○文房四譜學海類編本脫「洛」字。(二) ○文房四譜「鳴鶴」作「鴻鵠」。玉函引作「鳴鶴」。(三) ○玉函「幽」作「迷」。(四) ○玉函「玄」作「言」。文房四譜「默」作「墨」。(五) ○文房四譜「禮義」作「義禮」、學海類編本作「義理」。(六) 「文房四譜注云」、「出劉氏小說、又出語林」。

38 裴秀母是婢、秀年十八、有令望、而嫡母妬、猶令秀母親役。後大集客、秀母下食。<sup>(一)</sup>衆賓見、並起拜之。荅曰、『微賤豈宜如此。當爲小兒故耳。』於是父母乃不敢復役之。<sup>(四)</sup>

校記 類聚三十五。御覽五百。○記纂淵海一〇二。天中記一九。淵鑑二五八奴婢。玉函78。周氏43。同話に『類林雜說』一三。

(一) ○御覽「母是婢」三字在「令望」下。(二) 類聚引作「猶令秀母親下食與衆賓」、今據御覽。○記纂淵海與類聚同。(三) ○類聚、淵海俱無「衆」字。(四) 「父母」御覽引作「大母」。○淵海作「嫡母」。御覽「役」作「使」。

39 夏少明在東國不知名、聞裴逸民知人、乃裴糧寄載、入洛從之。未至家少許、見一人著黃皮袴褶、乘馬將獵。少明問曰、『逸民家若遠。』荅曰、『君何以問。』少明曰、『聞其名知人、從會稽來投。』裴曰、『身是逸民、君明可更來。』明往、逸民果知之、又嘉其志局、用爲西門侯。於此遂知名。

校記 御覽四百四十四、又六百九十五、又八百三十二。\*書鈔一百二十九。○淵鑑三七五袴褶。玉函59。舊小說5。周氏44。同話は『劉氏小說』〔廣記〕一七三。

(一)○御覽六九五無「國」字。(二)四字御覽引有。(三)○書鈔「之」下有「日」字。(四)○御覽四四四「家」上有「裴」字。(五)○御覽六九五「少明」作「夏」。御覽八三三無「少明」二字。御覽四四四無「日」字。(六)○御覽六九五、又八三三、「逸民」上有「裴」字。「若遠」二字、御覽四四四作「遠邇」、六九五作「近遠」、八三三作「遠近」。(七)○御覽四四四鮑本無「日」字。(八)○御覽「少明」作「夏」。(九)○書鈔引至此。御覽「從」上有「故」、「投」下有「之」。(一〇)○御覽四四四無「君」。(一一)○御覽六九五、又八三三無此五字。(一二)○御覽六九五「用」上有「乃」、又八三三「西」下有「明」字。(一三)○御覽八三三中華書局本文末有「也」字。

40 李陽性游俠、士庶無不傾心。爲幽州刺史、當之職、盛暑、一日詣數百家別、賓客與別常填門、遂死於几下。

校記 世說規箴篇〔8〕注。\*御覽四百七十三。○淵鑑三一遊俠。玉函14。周氏45。

(一) 御覽引作「李陽大俠」。(二) 三句「一四字」御覽引有。(三) 御覽四百七十三引作「列賓客填門」。○御覽四七三中華書局本作「賓客常填門」。

41 中朝有人詣王太尉、適王安豐大將軍丞相在坐、因往別屋、見李寅平子、還謂人曰、『今日之行、舉目皆琳瑯珠玉。』

校記 御覽八百三。○玉函146。周氏46。同話は『世説』容止篇15。「李寅」を「(王)季胤」とする。

(一)○中華書局本「適」作「過」。(二)○「屋」鉤沈本據鮑本作「國」、今據中華書局本。(三)○御覽無「日」字、玉函亦無。或鉤沈以意補之。

42 王夷甫處衆中、如珠玉之在瓦石。

校記 御覽八百三。○玉函147。周氏47。同話に『世説』容止篇17。

43 裴令公目王安豐、『眼、爛爛如崑下電。』

校記 續談助四。○鉤沈『小説』112。周氏48。同話に『世説』容止篇6。但し同篇10では評者と被評者が逆になっている。

44 和嶠諸弟往園中食李、而皆計核賣錢、故嶠婦弟王濟伐之也。

校記 世説儉嗇篇〔1〕注。○事文類聚後集二五。天中記五二。玉函35。周氏50。同話は『晉書』王濟傳。

45 劉道真年十六、在門前弄塵、垂鼻涕至胷。洛下年少乘車從門過、曰、『年少甚埽埴。』劉便隨車問、爲惡爲善爾。劉曰、『令君翁亦埽埴、母亦埽埴。』

校記 御覽三百八十五。＊御覽三十七。○玉函107。同話は明鈔『說郛』卷二三『殷芸小説』、注に「雜記に出づ」とする。鈎沈『小説』125。

(一) ○御覽三七、「十六」作「十五六」。(二) ○御覽三七引至此。三八五無「涕」字。(三) 當有奪誤。○奪誤、可  
以『小説』補訂。(四) ○埏埴注云、「上呼回反、下徒回反」。

46 劉道眞遭亂、自於河側牽船。<sup>(一)</sup>見一老嫗採桑逆旅、劉謂之曰、「女子何不調機利杼、而採桑逆旅。」女荅曰、「丈夫何  
不跨馬揮鞭而牽船乎。」<sup>(二)</sup>

校記 書鈔一百三十七。類聚二十五。御覽四百六十六、又七百六十九。○記纂淵海一六五、又一八九。事文類聚別集  
二〇。天中記二六。淵鑑二九九嘲戲、又三八六舟。玉函67。周氏52。同話は『廣記』二五三所引『啓顏錄』、又『類  
說』(文学古籍刊行社景明天啓刊本) 一四所引『啓顏錄』、及び『類林雜記』五。

(一) ○類聚無「遭亂」二字。(二) ○類聚、御覽、淵海俱作「於河側自牽舡」。類聚、御覽「船」作「舡」、下倣此。  
(三) 四字御覽一引作「棹櫓」、下放此。○類聚作「採旅」、御覽四六六中華書局本作「採櫓」、鮑本作「棹櫓」、淵海  
一引作「探櫓」、一引作「搖櫓」。廣記作「操櫓」、類說引作「搖櫓」。按「採桑」是女工、無關嘲戲。又「採櫓」、「探  
櫓」、「採旅」、「棹櫓」皆意不通、當或從廣記作「操櫓」、或從淵海、類說作「搖櫓」。(四) ○類聚「謂」作「喁」、御  
覽七六九鮑本作「調」。淵海一六五無「謂之」、一八九無「劉調之」。(五) ○並與(三)同。(六) ○御覽七六九鮑本  
無「曰」字。(七) ○御覽、淵海並無「乎」。

47 道眞嘗與一人共索祿草中食、見一嫗將二兒過、竝青衣。調之曰、『青羊將兩羔。』嫗荅曰、『兩猪共一槽。』

校記 類聚二十五。○天中記二六。淵鑑二九九嘲戲。玉函73。周氏53。同話は『類林雜說』五。

(一) ○宋本類聚「調」作「調」。

48 劉道眞子婦始入門、遣婦虔、劉聊之甚苦、婢固不從、劉乃下地叩頭、婢懼而從之。明日語人曰、『手推故是神物、一下而婢服淫。』

校記 類聚三十五。海錄碎事七。○天中記二九。淵鑑三一四淫。玉函77。周氏54。

(一) ○類聚汪校語云、「原作婦、據馮校本作婢。今從之。」(二) 海錄碎事七引「子婦」至「甚苦」十二字、僅作「求」字。(三) ○海錄無「固」字。(四) ○海錄無「劉」字。(五) 「海錄」「推」作「椎」。

○海錄「故」作「固」。

49 賈充問孫皓曰、『何以好剝人面皮、』皓曰、『憎其顏之厚也。』

校記 御覽三百六十五、又三百七十五。○記纂淵海一五三。事文類聚一八。天中記二二。淵鑑二五九面。玉函101。周氏56。本書51と同工。

(一) ○御覽無「曰」字。玉函引有。(二) ○御覽三七五無「好」字。淵海無「皮」字。(三) ○御覽三六四無「也」字、淵海作「耳」。

50 吳主孫皓字孫賓、卽鍾之女孫也。晉伐孫皓、皓降晉、晉武帝封皓爲歸命侯。後武帝大會羣臣、時皓在座、武帝問皓曰、『朕聞吳人好作汝語、卿試爲之。』皓應聲曰、『□』因勸帝酒曰、『昔與汝爲鄰、今與汝作臣。闕汝闕春。』座衆皆失色、帝悔不及。

校記 類林雜說五。○周氏55。同話は『世說』排調篇5。また敦煌文書P.二五二四文筆篇云、

汝語 吳主孫皓。晉伐吳、孫皓降晉。晉武帝封皓爲歸命侯。晉帝會郡臣、皓在坐。帝詔皓曰、朕聞吳人好作女語、卿試爲之。皓時執酒杯。因勸帝曰、昔與汝隣國、今與汝作臣、上汝一杯酒、令汝壽萬春。

(一)○語林所闕、可據世說補。世說云、「上汝一杯酒、令汝壽萬春」。

51 王武子與武帝圍碁、孫皓看。王曰、『孫歸命何以好剝人面皮。』皓曰、『見無禮於其君者則剝其皮。』乃舉碁局、武子伸腳在局下、故譏之。

校記 御覽七百五十三。\*御覽三百六十五、又四百九十。○事文類聚後集一八。淵鑑三二九圍碁。玉函102。周氏57。

『語林』49と同工。また『六帖』二九。『晉書』王濟傳。

(一)○御覽四九○「王」上有「晉」。(二)○七五三「看」作「在側」。(三)○四九○「曰」作「問」、七五三「王曰」作「武子問」。(四)一「七五三」引作「則剝之」。○七五三又無「其」字。四九○作「卽剝其面皮」。(五)○七五三「乃」上有「武子」、「局」下有「下」字、而無下一句七字、訛奪。(六)○三六○、四九○引至此爲止。事文類聚亦同。

52 王濟字武子、太原人<sup>(二)</sup>也。又魏舒字陽元濟陰人也。二人並善射、見重當時、俱仕晉朝<sup>(三)</sup>。

校記 類林雜記九。○敦煌文書P.二六三五。いまこれを底本とする。周氏58。同話は『晉書』(御覽七四四引)。

(一)○類林無「也」字、下同。(二)○類林無「並」字。(三)○類林「見」作「名」。(四)○類林「俱」作「並」、又無「朝」字。

53 王武子性愛馬、亦甚別之、故杜預道王武子有馬癖、和長輿有錢癖<sup>(二)</sup>。武帝問杜預、卿有何癖<sup>(四)</sup>。對曰、臣有左傳癖<sup>(五)</sup>。

校記 世說術解篇「4」注。李瀚蒙求注。事類賦注十引云、

杜預嘗謂「宋本嘗謂作道」、王武子有馬癖、和長輿有錢癖、已有左「宋本無左字」傳癖。

\*御覽八百三十六。○天中記五五。玉函22。玉函補編引蒙求注。周氏59。同話は『晉書』杜預傳。

(一)蒙求注引無此二句。○御覽、事類賦注亦同。(二)○蒙求無「故」、「預」下有「字元凱」、「道」作「常云」。

(三)「杜預」已下二句亦見御覽八百三十六引。(四)○蒙求無「杜預」。(五)○蒙求無「對」字。

54 王武子葬、孫子荆哭之甚悲、賓客莫不垂涕<sup>(二)</sup>。哭畢、向靈座曰、卿常好驢鳴、今爲君作驢鳴<sup>(四)</sup>。既作、聲似眞、賓客皆笑<sup>(三)</sup>。孫曰、「諸君不死、而令武子死乎<sup>(五)</sup>。」賓客皆怒。須臾之間、或悲、或怒、或哭<sup>(二)</sup>。

校記 御覽四百八十七、又五百五十六。\*世說傷逝篇「3」注。御覽三百八十八、又三百八十九。\*御覽三百九十一。

○淵鑑二六七笑(節引、與御覽三九一同)、哭。玉函20。舊小說(上海書店影印本)2。周氏60。

(一)○御覽三八九「葬」作「死」。三八八、四八七、五五六皆「葬」下有「夕」字。(二)○四八七、五五六「不」



下有「爲」字。(三)〇三八八「座」作「坐」。五五六無「座」字。(四)〇三八八無「常」。三八八、三八九俱「好」下有「我作」二字。(五)〇三八九「今」下有「我」字。三八九、五五六「君」作「卿」。三八九鮑本無「驢鳴」。(六)「哭畢」至此已上、世說注引作「既作驢鳴、今依御覽引補」。〇三八八此二句五字、中華書局本作「因作驢鳴似眞聲」、鮑本作「因作體似聲眞」。三八九無「既作」二字、鮑本「聲似眞」作「體似聲眞」。五五六作「體似眞聲」。(七)御覽三百九十一引云、「弔王武子客正哭、見孫子荆驢鳴、變聲成笑」。〇御覽三九一引至此。三八八皆「笑」作「莫不笑」、五五六作「莫不大笑」、四八七作「大笑」。(八)〇「孫」下、三八八、四八七、五五六俱有「聞笑顧謂」四字、三八九有「聞之」二字。(九)〇三八八、五五六皆無「而」字。御覽皆「武子」上有「王」字。三八八、三八九、五五六俱無「乎」字。(一〇)〇世說注、御覽三八八、又三八九引至此。三八八、四八七、五五六俱「皆」上有「莫不」二字。三八九句末有「焉」字。(一一)〇御覽中華書局本「或怒或哭」四字作「或笑或怒」、四八七鮑本無「或怒」。

55 戴叔鸞母好驢鳴、叔鸞每爲驢鳴、以樂其母。

校記 御覽三百八十九。〇玉函21。周氏3。周氏は戴の後漢の人たるを以て、鉤沈1の樓護の後に移す。同話は『世說』傷逝篇1注、「樂」を「說」に作る他は同文。

56 中朝方鎮還、不與元凱共坐。預征吳還、獨榻、不與賓客共也。

校記 世說方正篇「13」注。〇玉函5。周氏61。關連する話は鉤沈『郭子』18、並びに『世說』該篇13。

57 洛下少林木、炭止如栗狀、羊琇驕豪、乃禱小炭爲屑、以物和之、作獸形。後何召之徒共集、乃以溫酒。火熱既、猛獸皆開口向人、赫赫然。諸豪相矜、皆服而效之。

校記 御覽八百七十一。○敦煌文書P.二五二四云、富貴 獸炭。語林曰、中略見58。屑炭末獸形。溫酒、獸炭皆張口赫。

事文類聚續集一八。淵鑑三六○炭。玉函150。周氏62。同話は鈎沈『小説』120。『晉書』羊琇傳。『晉朝雜記』（御覽四九三引）。『類林雜說』八。

(一)○事文類聚此句上有「晉羊琇字稚舒、景獻皇后從弟性豪侈」十五字。(二)○事文此句作「炭貴如栗」。(三)○事文此句作「琇」一字。(四)○鈎沈「召」本作「呂」、玉函亦作「呂」。今暫從御覽、而俱必有訛誤。事文作「劭」。(五)○御覽中華書局本「既」作一空格、鮑本作「既」。或當刪歟。(六)○鈎沈脫「赫」字、今補。玉函亦脫。(七)○事文此二句作「諸貴皆效之」。

58 羊稚舒琇冬月釀酒、令人抱甕煖之、須臾復易其人。酒既速成、味仍嘉美。其驕豪此類。

校記 續談助四。\*御覽二十七。\*海錄碎事六。書鈔一百四十八。御覽七百五十八。○鈎沈『小説』121。敦煌文書P.二五二四云。富貴 獸炭。語林曰、羊琇字稚舒、爲晉散騎常侍、冬日作酒、人之抱甕酒、交易人、而酒便獸。獸當作熟。已下57已引。類說二九『雞跖集』。天中記四四。五朝小說12。淵鑑一六冬、又三八四甕、又三九三酒。玉函70。周氏63。(一)○續談助、御覽二七「稚」俱誤作「雅」。書鈔作「羊琇字稚舒」。御覽、海錄（上海辭書出版社景明萬曆刊本）俱無「琇」。御覽二七「月」作「日」、敦煌亦同。(二)海錄碎事六引至「抱甕」、下云、「速得味好」。亦見書鈔一百

四十八、御覽七百五十八、「暖之」並作「爲暖」。(三)○御覽無「其」。(四)「二句」御覽二十七引作「速成而味好」○御覽二七引至此為止。

59 劉實詣石崇、如廁。見有絳紗帳大牀、茵蓐甚麗、兩婢持錦香囊。實遽反走、即謂崇曰、「向誤入卿室內。」崇曰「是廁耳。」實更往向、乃守廁婢所進錦囊、實籌。良久不得、便行出。謂崇曰、「貧士不得如此廁。」乃如他廁。

校記 御覽一百八十六。＊御覽七百四。＊世說汰侈篇〔2〕注。○御覽六九九。天中記一五、又四八、四九。五朝小說14。淵鑑二八六富。又三一三奢、又三七六帳。玉函36。舊小說3。周氏64。同話は敦煌文書P.二五二四、次條60參照。

(一)○世說注、御覽一八六、「實」作「寔」、下倣此。御覽六九九作「植」。(二)○御覽一八六、六九九「紗」作「文」、俱無「大牀」二字。(三)○御覽一八六無「香」字。(四)○御覽一八六「反走」作「退」一字。(五)○御覽一八六「卽」作「笑」。(六)○御覽一八六無「內」字。(七)○世說注引至此止。(八)御覽七百四引云、「石崇廁內兩婢持錦囊、是籌也」。○御覽一八六中華書局本「實」作「是」。(九)○御覽一八六中華書局本無「如」。又六九九引無「兩婢」以下至「此廁」之文、止作「不得行」三字。(一〇)○御覽六九九「乃」下有「更」字。

60 石崇廁常有十餘婢侍列。皆佳麗藻飾、置甲煎沈香、無不畢備。又與新衣、客多羞不能著。王敦爲將軍、年少、往、脫故衣、著新衣、氣色傲然。羣婢謂曰、「此客必能作賊。」

校記 御覽一百八十六、又五百。＊御覽七百十九。○五朝小說15。淵鑑三五○廁。玉函37。周氏65。同話に『世說』汰侈篇2。また敦煌文書P.二五二四云、崇會客、崇廁內置侍婢十人、皆衣錦繡絜瀾。侍中劉恒往廁、將謂入室、寺

〔時〕走出。崇曰廁也。

(一) ○御覽五〇〇無「常」字。(二) ○五〇〇無以上二句十字。(三) 御覽七百十九引云、「石崇廁置甲煎粉沈香汁之屬」。○五〇〇「無」作「莫」。(四) ○五〇〇「衣」下有「出」字。(五) ○一八六無「羞」字。五〇〇「著」作「如廁」二字。(六) ○五〇〇「爲」作「大」。(七) ○五〇〇無「年少」。(八) ○五〇〇「氣色」作「意」。

61 石崇恒冬月得韭齏、爲客作豆粥、咄嗟便辦。王愷乃密貨帳下都督。云、是擣韭根、雜以麥苗耳。豆難煮、豫作熟豆、以白粥投之。

校記 御覽八百五十五、又八百五十九。○書鈔一四四、又一四六。但し後者は出處を缺く。玉函149。周氏66。『玉函』、『鉤沈』は『御覽』で二條として別出するものを『世説』に效つて一條にまとめた。同話は『世説』汰侈篇5。

『晉書』石崇傳。

書鈔一四六云、韭齏。□□云、石崇冬月得韭薺、王愷貨帳下督云。孔注云、此條或出語林耳。

御覽八五五云、語林 石崇嘗冬月得韭薺、王愷貨崇帳下督。云、是擣韭根、雜以麥苗耳。

書鈔一四四云、咄嗟便辦。語林云、石崇爲客作豆粥、咄嗟便辦。王愷乃密貨崇帳下。曰、豫作熟豆。

御覽八五九云、石崇爲客作豆粥、咄嗟便辦。王愷乃密貨崇帳中鮑本作下。都督。曰、豆難煮、唯豫作熟豆、以白粥投之。

62 石崇與王愷爭豪、窮極綺麗、以飾車服。<sup>(一)</sup>晉武帝、愷甥也、每助愷。以珊瑚高二尺許、枝柯扶疏、世間罕比。<sup>(二)</sup>愷以示崇、崇視訖、以鐵如意擊之、應手瓦碎。<sup>(三)</sup>愷聲色俱厲、崇曰、『此不足恨。』乃命取珊瑚、有三尺光彩溢目者六十七枚。愷

悵然自失。

校記 御覽七百三。\*類聚七十。○天中記四九。淵鑑三七九如意。舊小說8。玉函85。周氏67。同話は『世説』汰修篇8。李翰『蒙求注』中、『晉書』石崇傳。また敦煌文書P二五二四云、

石崇字季倫。晉惠帝時、爲侍中、居洛陽金谷、富於晉國。晉武帝弟王愷、與崇相誇、作紫絲布步障冊里。崇作錦步障五十里。帝有珊瑚一株、惜愷。愷示崇、崇笑之。以馬鞭擊碎。愷怒曰、卿死矣。崇笑□婢取好樹一株。

(一)○御覽無二句八字。(二)○御覽「愷」下有「之」字。(三)○鈎沈「二」本作「三」、七三年版全集已據類聚御覽正。(四)○御覽無以上二句八字。(五)○御覽「示」下有「之」字。(六)○御覽無此句三字。(七)類聚七十「引至此爲止」。(八)○中華書局本「枚」作「校」、鮑本作「枝」、玉函作「枚」。世説作「枚」、又無「十」。

63 潘石同刑東市、石謂潘曰、『天下殺英雄、卿復何爲。』潘曰、『俊士填溝壑、餘波來及人。』

校記 世説仇隙篇「1」注。○玉函39。周氏69。同話は『類説』四九『殷芸小說』「潘石同刑東市」(鈎沈佚之)。類話は『世説』仇隙篇1。

64 潘安仁至美、每行、老嫗以果擲之滿車。(二)張孟陽至醜、每行、小兒以瓦石投之亦滿車。(三)

校記 世説容止篇「7」注。御覽七百七十三。\*初學記十九。御覽七百六十七。○天中記二二(2)。淵鑑三八七車。玉函15。周氏68。同話は敦煌文書P二五二四云、又安仁乘車入市、洛陽嫗見之、競以瓜果擲之盈車。又S.七八。

類話は『世説』容止篇7。『瑠玉集』一四。

(一)○御覽七七三「至」作「見」。鮑本脫「仁」字。(二)初學記十九引作「每行於道羣嫗以果擲之常盈車」。○御覽七七三「滿」上亦有「常」、「車」下有「中」。(三)又七百六十七引云、「晉張載字孟陽甚醜、每出爲小兒擲瓦盈車」。

○御覽七六七「行」作「出」。御覽七七三無「小」字、「石」作「礫」、「投」作「擲」。

65

士衡在坐、安仁來、陸便起去。潘曰、「清風至、塵飛揚。」陸應聲荅曰、「衆鳥集、鳳皇翔。」

校記 續談助四。○明鈔『說郛』(商務印書館排印本)二五『殷芸小說』(鈎沈127)。天中記二六。周氏70。同話に敦煌文書P.二五二四云、

塵飛鳳翔。陸士衡坐、潘安仁來。陸起、潘曰、清風至、塵飛揚。陸荅曰、衆鳥集、鳳凰翔。

(一)○說郛「潘曰」作「安云」。(二)○說郛「皇」作「鳳」。

66

陸士衡在洛、夏月忽思竹篠飲、語劉實云、「吾鄉曲之思轉深、今欲東歸、恐無復相見理。」言此已、復生三歎。

校記 御覽八百六十一。\*事類賦注四。御覽二十一。○記纂淵海一七三、御覽二一引に同じ。天中記五。淵鑑一四夏、三九一飲。玉函68。周氏71。

(一)○「云」、鈎沈本作「曰」、今據御覽改、玉函亦作「曰」。(二)事類賦注四、御覽二十一引云、「陸機夏在洛、忽思東頭竹篠飲、語劉實曰、吾思鄉轉深矣」。(三)○御覽「欲」作「來」、玉函作「欲」。(四)○玉函注云、「北堂書鈔一百四十四引竹篠飲、陳禹謨補注引至相見理」。不見孔本。(五)○鈎沈玉函、俱作「復生三歎」、不知據何。御覽作「復之生惑」。御覽、鈎沈皆似意不通。

67 陸士衡爲河北都督、已被聞構、內懷憂慙、聞衆軍警角鼓吹、謂其司馬孫掾曰、『我今聞此、不如華亭鶴唳。』

校記 書鈔一百二十一。類聚六十八。御覽三百三十八。又四百六十九。＊世說尤悔篇〔3〕注。○御覽五六七。天中記五八。淵鑑二二八角、又三六八鼓吹。玉函50。周氏72。『續談助』四『殷芸小說』(鈎沈128)引く「士衡」一條は「出小史」とするが此條と同じ。

(一)○類聚、御覽三三八、又五六七俱無「都」字。(二)○御覽五六七「已」上有「日」字。御覽四六七、又五六七「構」作「搆」。(三)「鼓吹」二字類聚引有。○御覽亦有。御覽三三八中華書局本、四六九俱「警」作「驚」。(四)世說尤悔篇注引作「機爲河北都督、聞警角之聲、謂孫丞」。○御覽五六七無此一句六字。類聚無「孫掾」二字。御覽三三八中華書局本「掾」作「極」、誤。三三八鮑本以及四六九作「拯」。(五)○御覽四六九無「今」字。(六)○「鶴唳」、世說、又四六九鮑本俱同。御覽五六七作「戾」。書鈔、類聚、御覽三三八、又四六九中華書局本俱作「鶴鳴」、類聚又句末有「也」字。

68 宗岱爲青州刺史、禁淫祀、著無鬼論甚精、莫能屈。後有一書生葛巾修刺詣岱、與談論、次及無鬼論、書生乃振衣而去曰、『君絕我輩血食二十餘年、君有青牛髻奴、所以未得相困耳。奴已叛、牛已死、今日得相制矣。』言絕而失。明日而岱亡。

校記 御覽五百、又五百九十五、又八百八十四、又八百九十九。○五朝小說19。古今圖書集成神異典七(第四八九冊三十b)。玉函124。舊小說10。周氏73。同話に『續談助』四『殷芸小說』、『類說』四九『殷芸小說』及び『廣記』

三一七（ともに「雜語に出づ」とする。鈎沈131）。

（一）一引作「宋岱」。○御覽五九五、又八九九俱作「宋」。（二）○御覽五九五、又八八四俱無此句三字。（三）○八八四中華書局本「鬼」下有「神」字。（四）○八九九無「甚精」以下至「後」六字。八八四無「有一」、五九五無「一」。五〇〇、又五九五、又八八四俱無「葛巾修刺」四字。（五）○五〇〇「與」上有「岱」字。五九五無「與」字。八八四作「談」一字。（六）○五〇〇無此句五字、八八四無「無」字。（七）○五九五、又八八四俱「振」作「拂」。八九九無「與談論」以下至「而去」十五字。（八）○五〇〇無「君」字。（九）○五九五、八八四俱「君」上有「以」字。（一〇）○八八四無「耳」字。（一一）○五九五、八八四「奴」上俱有「今」字。（一二）○五九五無「叛牛已」三字。（一三）○五九五中華書局本、八八四俱無「日」字、五九五鮑本無「今日」二字。又八八四無「矣」字。（一四）○五九五「絕」作「終」。又五九五鮑本「失」作「去」。（一五）○五九五無「而」字。八八四此句作「來日岱亡」。八九九中華書局本「亡」作「死」、鮑本此句作「明日岱死」四字。

69

明帝數歲、坐元帝鄴上、有人從長安來、元帝問洛下消息、潛然流涕。明帝問何以致泣。<sup>(1)</sup>具以東渡意告之。因向明帝、  
『汝意謂長安何如日遠。』荅曰、『日遠、不聞人從日邊來。』居然可知、元帝異之。明日、集羣臣宴會、告以此意。更  
重問之、乃荅曰、『日近。』元帝失色、曰、『爾何故異昨日之言邪。』荅曰、『舉目見日、不見長安。』

校記 書鈔七引語林云、答長安近日。其文不全、今以世說夙慧篇〔3〕補之。○玉函41。舊小說4。周氏74。同話は  
『劉昭幼童傳』（『初學記』一、『事類賦注』一引）。敦煌文書S.一三三。『晉書』（中華書局標點本）明帝紀、又『類林  
雜說』四。



(二)○鉤沈「泣」本作「臣」、玉函亦同。今正。

70 晉明帝年少不倫、常微行、詔喚人以衣幘迎之。涉水過、衣幘悉濕。元帝已不重明帝、忽復有此、以爲無不廢理。旣入、幘不正、元帝自爲正之、明帝大喜。

校記 御覽六百八十七。○淵鑑三七○幘。玉函129。周氏75。